

子供の教育

Journal of the Association for childhood Education

一九六八年十二月号は、「グループビ
ングの方法」と題する特集号で、グループ
ビングの本質、グループビングのあり方、グ
ループビングの具体例などさまざまな論文
を集めている。

J・ランド、F・テイラーは「なぜグ
ループを作るのか」という巻頭論文で、
グループビングの本質について次のように
問うている。

教育者にとって古典的な課題であるグ
ループビングの問題は、主として「ある特
定の課題のもとに、ひとりひとりが最大
の成長をとげるための解決策であり、学
習効果を高める方法である」という前提
のもとに討議されている。しかし、時代
とともに教育の目標それ自体が大きく変
化し、知識を身につけることよりは、知
識を媒介に変化し適応することの方が重
要になってきた今日、グループビングにつ
いても新しい意味を見出さなければなら

ない。

グループビングは共通の問題に群がらせ
る手段であるばかりではなく、物を考え
たり、相互に影響しあう社会的場である
という見方をするなら、そこに新しい意
義を見出すことができるであろう。そし
てグループビングが一つの手段として成り
立つためには、学習課題と今日の社会の
要求、あるいは学習者の要求とがみ合
っていないければならない。かみ合った中
で、グループの成員が学習課題について
掘り下げて考えることが行なわれると
き、グループビングは効果をあげることが
できるのである。

しかし、学習課題によっては、社会的
規制の強いものもあり、グループをひと
つにまとめようとする危険性のあるもの
もあるが、納得のいく限界を設けて異端
者を保護するのが創造的教師のつとめだ
ある。教師が、何のため、いつ、誰と、

なぜ、グループングをするかということを見きわめ、子どもの個人的要求に基づいた学習課題を用意するとき、一層グループングの効果が高めることができるのである。そして、「なぜグループを作るのか」という課題も、結局子どもの要求と教育目標とをともによく熟知した教師だけが正しい答を出すことができるのである。とテイラー氏は結んでいる。

次に、D・M・リーの「個人に即したグループングとは？」という論文は、グループングのひとつのあり方とその効果について論じたもので、個人に即した教育をリー氏は次の二つの条件を満たすものと定義する。

① それぞれの子どもが、所属するグループに独自の意味を見出し、グループの計画や決定に加わっていること。

② 独自のやり方や自分が現在理解しているわくの中で学習することが尊重さ

れ、学習の手続きに関して自分流のやり方が認められること。

すなわち、個人に即した教育には、自己目的な学習が必要なのである。リーのどく自己目的な学習とは、学習する者が自己の教育的要求を直視して、要求を満たすのに必要なものや最も効果的に目的に達する方法を自分で決定することであり、教師が子どもといっしょに計画に参加したり、個別的な話し合いによってこの学習を進展させることができる。

さて、グループとは、共通の関心や共通の要求、計画を同時に有する子どもたちの集まりのことで、一人または数人の子ども、あるいは教師や教師と子どもとの相互関係によって動くものであるから、自分で仲間を選び、しかも自己目的的活動の行なわれるグループは、教師が動かすグループには見られない価値があ

るのである。その理由として、自己選択による学習によって自己や集団に対して責任感が育つことをあげ、二つの事例を示しながら証明している。

ひとつは、まわりの物や人に対する概念（外国に対する知識）を進展させた例であり、もうひとつは、ある技能（ノートのとり方）の獲得に成功した例である。

最後に、フ氏は、グループの形、メンバーは共通の関心を土台にしてたえず変化するので、グループには幅広い目的と活動を用意する必要があると説く。アレソンの「学習センターを通してのグループング」も、グループングのあり方を提言した論文である。

ア氏は、グループングに関する二つの神話——「グループが何かを学ぶ」「同じ成能力をもつ子どもは同じグループに入れる」——を排し、教育は「終りの

ない質問に答える能力を育てる」ことよりも、「個人の生き生きとして発する質問を受けとめる」ことの方が真実に近いという立場から、さまざまな学習センターを活用したグループ・ワークを主張している。

学習センターとは、学校内および学校の周辺に組織された教師も子どもも共に学習する場で、図書センター、視聴覚センター、ゲームセンター、科学センターの種類がある。ここでは、ひとりひとりの子どもが自分の価値を見出せるような、また、次第にむずかしくなっていく発達課題をうまくこなしていけるような配慮がなされ、ひとりですぐ喜び、同じ年齢や年齢の異なる友だちといっしょに遊ぶ喜びを体験するのである。

このような学習センターをうまく活用するなら、特徴のあるやり方で子どもを育て、個々のパーソナリティを尊重しな

から個性を生かした教育ができ、それと同時に教師もまた、センターでのグループ指導を通して子どもたちに意味のある質問をしたり、技能や能力を促進する機会を得るにちがいないと主張している。

その他、W・ノリンの「いくつかのグループビングの実践」では、年齢や能力による古いグループビングからティーム・テイチング、中間学校、無学年制等の新しいグループビングまでのさまざまな実践をグループの歴史から論じ、子どもを自己の「わく」の中で自律的に成長させようとする人々に新しいグループビングが大きな可能性をもつものであることを指摘している。

この号には、教師の努力によって、レウイスという少年がサマー・スクールのグループに適應していく過程を扱った感動的な実践例も紹介されている。(〇)

幼児の教育 第六十八巻 第七号

七月号 © 定価八〇円

昭和四十四年六月二十五日印刷
昭和四十四年七月一日発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一

印刷所 凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

© 本誌御購読についての御注文は発売所
フレーベル館にお願いたします